
異世界冒険鬼(仮題)

八咫烏村長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界冒険鬼（仮題）

【Nコード】

N9466X

【作者名】

八咫烏村長

【あらすじ】

時は近代、平成の世
高校進学を機に幼少期を過ごした町へ戻ってきた主人公は、幼馴染と再会を果たす

道に迷った主人公を幼馴染が助けたり、不良に絡まれた主人公を幼馴染がぶっ飛ばしたり

ちよつとポジション変わってくれ！とか思う間もなく妖の出現と呼応するように『鬼ノ血』に目覚めた主人公

高校生活をおくりながら、妖怪を狩る日々だったのだが…。

第一話 これでも世界は平和だった（前書き）

キーワードと警告はあくまで予定です！

特に恋愛！とくくくに恋愛！

書けなかったらごめんなさい…

第一話 これでも世界は平和だった

夜の住宅街を駆け抜ける者たちがいる

前方に行くのは火のついた輪、後方に行くは高校生ぐらいの男

はたから見れば一体何をしているのかと首を傾げる人がいただろう
もしかしたら男が火のついたタイヤを転がして遊んでいるように見えるかもしれないが

当の男が聞いたら心外だと言うだろう

(くそっ、車輪だけあってはえーな！)

何とか離されないように全力で追いかける

住宅街の角を曲がり続けて既に1km以上走っているだろう

男は、片手に持った黒い箱に声を掛ける

「っし！目標、予定のポイントに向けて移動中、あと5秒ほどで着く」

「ザッ、了解」

黒い箱からは女性の声が聞こえた。

火のついた車輪が十字路に差し掛かった瞬間、角から人影が飛び出し手に持った木刀を叩きつけた！

ガッ

その衝突で両者、程度の差はあれ体勢を崩したところに男が追いつく

『目覚める、鬼ノ血！』

瞬く間に男の体が膨れ上がり、頭から2本の角が生える
鬼と化した男は走ってきた勢いのまま豪腕を振り下ろした。

「ふ〜、あー疲れた〜」

鬼の姿から人の姿へと戻った俺は住宅街の壁に背中をつけ呼吸を整える

俺の名前は武宮亮平^{たけみやりょうへい}、中肉中背で若干目つきは悪いが、はっきり言
ってどこにで

もいるような高校生男子だったはずだ、約1週間前までは…

「追い込み役ご苦労様」

木刀を持った女は、ねぎらいの言葉と共にスポーツドリンクを差し
出してくれた

「おつ、サンキュー助かるわ〜」

目の前の女は山城綾乃^{やましろあやの}、一ヶ月ほど前に再開した幼馴染だ

まあ、幼馴染といっても十年近く会っていなかったが、この一ヶ月
で大分打ち解けることができた

黒髪、黒目、髪はロングで前に流した毛先がほんの少し内側にカー
ブを描く

実家が古武術の道場ゆえか、背筋はぴんつとのび凜とした雰囲気を持
ちスタイルもよく、胸もそこそこ

再会したときは余りの美少女っぷりに開いた口が塞がらなかったが
一ヶ月もコンビ組んでればさすがに慣れる

(そう、慣れた。だから今鼓動が早いのは走った後だからだ)

誰に聞かせるでもないが、いいわけじみた言葉を心の内でつぶやきながら気持ちを切り替え

薄れ消えゆく火のついた車輪へ視線を移す

火のついた車輪　火車^{かしゃ}、妖怪である

ほんの少し前までは妖怪が実在するなんて俺は思ってもみなかったし自分が鬼の血を引いているなんてことも知らなかった。

それとなく両親に尋ねてみたが、芳しい反応は返ってこなかったので多分知らないのだろう

まあ、とぼけている可能性もないではないが…

この街では三週間ほど前から、原因不明の怪異が発生している
とりあえず今回倒した火車で放火事件は終わりをつける筈だが怪異
自体が終わるとは思えない

俺は肩を並べて帰路につきつつ、綾乃にそのことを尋ねてみた

「…なんともいえないな、噂で聞いた光る地面の話、あれも火車の
仕業なら今聞く限りの噂話はほぼ片付けたはず…やはり原因を見つ
けないことには解決しないのかもしれない」

「はあ、高校生ライフがこんな破天荒なものになるなんて想像
もしてなかったぜ」

「それはお互い様だ、キミと再会してからずっと私だって思いもよ
らない事だらけだよ」

「うっそだ、最初の頃の不良をぶっ飛ばしてたのは日常茶飯事だ
ろ」

「…私は文武両道を志し、日々鍛錬に励んでいるので暴力事件を起
こしている暇などともありません」

俺はすまし顔をして歩く綾乃の横顔を、半眼で睨みつけていたが数秒後二人そろって吹きだした

「綾乃、お前が強いのは分かっているけどアッチコッチで恨みを買うのはやめてくれ、さすがにあんな思いは何度もしたくない」

「校舎裏に呼び出されて十八人に囲まれたときのことか？本来五十三人に囲まれてやつらの溜まり場に連れて行かれるところだったんだ、一度に戦う数を十八人にまで減らした頭脳プレーを褒めてくれ」

「褒めれるか！その前に恨みを買っくんじゃねえよ！」

「ま、まあ確かに、日々の積み重ねがあそこまで大事おおしてに成るなんて私も予想外だったがあゝ、継続は力なりという言葉のいい例だと思わない？」

「ポジティブすぎるわ！しかも絶対いい例ではない！」

さすがに綾乃も自分の口にした事を本気で言っている訳ではないらしく、気まずげに視線を明後日の方へと向けている

（まったく、あの頃はまだ鬼の力も使えんかったのに、よくもまあ二人だけで切り抜けたもんだ）

まあ、鬼の力など本気で振るえば一撃で重症間違いないと思うが再会してからというもの、綾乃に振り回されっぱなしだが、鬼の血など引いている時点で妖怪関連は無縁とはいかないのかもしれない

（ほんと、何でこんな事になったんだか…）

夜空に月を探しながら、そんなことを考えつつ歩いていると綾乃の声が聞こえた

「そう、だね。キミにはとてもお世話になってる」

「あん？別に恩に着せるために思い出させたわけじゃねえよ」

「そうだろうけど、一度お礼を言っておいたほうが良いかと思って
「ん、あー気にすんなよ。友人だろ俺ら」

改まって言われるとなんとも居心地の悪い、背骨を走る感覚に従う
とおかしな踊りを披露してしまいそうだ

「いや、考えてみたらいつの間にか有耶無耶になってしまって、い
つの間にか昔のようにキミが隣にいるのが当たり前だと思っていた」
「だ、気にスナナ」

感覚急上昇、コイツは俺を躍らせたのか！しかめっ面になるのが
抑えられん

しかし、綾乃は立ち止まって手を後で組み、更に追い討ちをかける

「この一ヶ月色々と助けてくれてありがとう、キミと再会して、ま
たこんなに仲良くなれたことが私はとても嬉しい」

（ちよつと待てその顔は反則だ）

本当に嬉しそうに微笑むその姿に鼓動が早くなるのを抑えられない
照れくさくてまともに見返すことが出来ず再び夜空に視線を向ける

（これで後ろ手に持っているのが木刀でなければ一発ノックアウト
だったかもしれない）

幼少期ボッコボコにされた記憶があるだけに、今の姿にときめくな
ど不覚としか言いようがない
そんな時、それが視界に入った

「紅い？」

夜空にある月が見たこともないほど鮮やかに紅く輝いていた
驚きに動きを止める俺に向かって綾乃が叫ぶ

「亮平！足元！」

戦闘中のような警告じみたアヤメの声に足元を見ると地面が輝いて
いる

「これは、魔方陣！？」

西洋の魔術の知識などないが、足元に広がるモノはそうとしか言い
ようがなかった

あっという間に光度が上がり、強烈な光の本流の中に俺たちは飲み
込まれた。

第一話 これでも世界は平和だった（後書き）

とりあえず始まりました

生暖かい眼差しで見守ってやってください

（ ^ | ^ <

現在の登場人物紹介

現在の登場人物（？）

* 武宮亮平 たけみや しょうへい

年齢：16歳 性別：男 種族：人間（人5：鬼5）

中肉中背の若干目つきの悪い男

装備：学生服

トランシーバー

ハンカチ

サイフ

スポーツドリンク（開封済み）

腕時計（鬼化の時にベルトがはじけるのでズボンに入れて
いる）

必殺技：『鬼ノ血の覚醒』：鬼化することにより攻撃力&防御力
が大幅に上昇

身長：177cm 体重65kg

幼少期、山背道場で古武術を学ぶが小二の時に転校

家庭の事情で4月に生まれた町に戻ってきた

この時までは普通の人間だったが

4月に起きた事件で幼少期に掛けられた術が解け鬼化できるよう
になる

5月初頭夜中に異世界へ飛ばされる

* 山城綾乃 やましろ あやの

年齢：16歳 性別：女 種族：人間

黒髪・黒目、凜とした美少女、クールな印象だが最近素直な面も

既に亮平とは大分打ち解けている

装備：学生服

トランシーバー（亮平から借りた）

ハンカチ

サイフ

木刀（火車討伐のために持ち出した、愛用の武器というわけではない）

秘伝の傷薬

寸鉄？（家の蔵にあつた神秘的な色合いの金属）

必殺技：『防御力無効』：精神集中した彼女の一撃は魂を直接殴ることが出来る

身長：163cm 目算C〜Dカップ

山背道場の一人娘、祖父と共に暮らす

幼少の頃から山背道場で祖父に鍛えられてきた

孫馬鹿な祖父により徹底的に柔法を中心にカウンターを叩き込まれた

攻撃はまだ掌打しか教えてもらっていないが、武器も扱えぬわけではない

亮平と共に異世界へ飛ばされる

* 山城彦斎やましろ げんさい

年齢：72歳 性別：男 種族：人間

長い歴史を持つ山背道場の現師範

孫馬鹿だが武術に関して人が変わったように厳しくなる

綾乃が道に迷った亮平を連れて一時帰宅したところ問答無用で亮平を蔵に叩き込んだ

まだまだ衰えぬ武術の達人

数年前孫が『防御力無効』を初めて使い、動きからは想像できない威力を発揮した。あまりの

不可解さに師弟そろって首をかしげた。

この物語に登場予定はありません

第二話 黒き石の部屋

強烈な光により視界を奪われ、再び見えるようになったのは十秒後か三十秒後か

過ぎた時間に確証を持ってないまま辺りを見てみると、

そこは壁も床も天井も黒い石で出来た部屋だった。

部屋の中にはフード付きの黒いローブの男達、顔の作りからして日本人ではなさそうだ

四角い部屋の中、角に四人の黒づくめが立ち、目の前には金の刺繍入りの黒いローブを羽織った老人が扉を背にして立っている。

部屋の中にいる俺達の以外の五人が会話し始めた。

「人間か？」

「いや、陣から出てきたのだ、おそらく化けているのだろう」

「しかも二人…いや二匹？とは珍しい」

「召喚の陣が暴走しかけたときにはどうなるかと思っただが、これは良いアクシデントだ」

「…時間が無い、急ぎ《首輪》の詠唱に入る」

(なんだこりゃ、場所が、移動している?)

彼らの言葉を信じるなら今起こったことは召喚

ゲームならば良く見かけれるが現実に体験するのは初めてだ

最近は妖怪を狩ってきたが、俺達は手から火が出たりするようなビツクリ人間ではない

今までは、あくまで日常に妖怪が紛れ込んで来ただけだった。

(いよいよ日常ってヤツがイカして来たか?)

「まずい、時間が無いのだ！早く取り押さえる！」

右手を向けてきた黒ずくめ達に対し綾乃は右側にいる男に向かった姿勢を低く一足飛びに間合いをつめ、相手の右手を左手で逸らし右肘を肋骨へと叩き込む！

骨にヒビでも入ったのか、痛みに怯んだ男の左腕を掴み捻りあげながら左右の角の男達への盾とする

一方、綾乃が老人を倒した後亮平は苦痛が薄れていくのが分かった。

(治りきつちやいないが時間がねえ)

『目覚めろ、鬼ノ血！』

鬼への変化と共に左右の男達が叫ぶ

『光よ！』

『雷よ！』

最小限のスペルで最速の魔術を放つものの亮平が突き出した両手はそれぞれの魔術を受け止めた。

(左手はちと痺れただけ、右手も軽い火傷か、なら問題ねえな！)

『ガアアアアアア！』

お返しとばかりの、咆哮は物理的な衝撃波を伴い男達を石壁へと叩きつける。

(まあ咆哮これの衝撃波はオマケみたいなモンで威力なんざほぼ無いが、挨拶代わりにやなるだろ)

「クソツ、やっぱり化けていやがったか。」

「ぐ…なんだ？あの姿は、トロールか？デーモンか？」

「っー、クソツ、やっと土壇場で儀式が成功したと思ったのに。」

苦々しげに睨むもの、痛みに顔をしかめる者とさまざまだが、
部屋の中は奇妙な膠着状態へと陥^{おちい}った。

（今なら会話が可能か？）

視線で綾乃に話をしてくれと頼む

俺のの意を汲んでくれた綾乃は四人の黒ずくめに声を掛けた

「すみません、今は自衛のため攻撃を行いました、私達はあなた方を好んで攻撃する意思はありません。私達を元の場所へ戻してくれませんか？」

綾乃の言葉に、四人は視線を交わす

「悪いが譲ちゃんはまだしも、その怪物を帰す訳にはいかない、我らには力が必要なのだ。」

「戦力は少しでも欲しい、そういう意味ではその娘も帰す訳には…
それに」

「いや、今私達と言ったな？もと男、お前は会話が可能か？」

仲間のセリフをぶった切った黒ずくめこのセリフで黒ずくめ達の視線が亮平へと集中する

刺激をしないように交渉を綾乃に任せていたが喋るしかないようだ
喋れないふりをする利点も無いしな

「もと男とか呼ぶのはやめろ、俺が男を辞めたみたいじゃねえか」

あからさまに、ホツとした様な顔をして話しかけてくる黒ずくめC
「いや、話せるならちようどいい。どうだ？お前が力を貸してくれるならそっちのお譲さんは帰してやる」

「…力を貸すつてのは、どういうことだ？」

「文字通りの意味だ、最近隣国に仕官した召喚術士が強力でな、下級とは言え魔物を一人で数十体も操るのだという、やつを倒すのを手伝って欲しい」

ためえらで勝手にやってろ！と叫びたくなる気分を抑えて別の事を尋ねることにする

黒ずくめ達はチラチラと倒れた老人へ視線を向けているようだ

「隣国つてのは？」

「我がデュゴス王国の隣国シエルトリー共和国だ」

念のため聞き覚えがあるかと綾乃の方をしてみるが彼女は首を振った。

さつきから嫌な予感しかしない、もしそうなら自分達には打つ手が無いことになるが

聞かないわけにはいかないだろう

（まあ、見た目が外人のこいつ等が仲間内の会話まで日本語で話してくれるいわれは無いよな）

「んじゃ俺からは最後の質問だ、ここは異世界か？」

「ああそうだ、お前達が元いた世界とは別の世界だ」

（はあ、会話が通じるのは良いが、これはマズいな…従うしかないか？）

「い、いい加減は、離してくれないか？」

綾乃に腕を捻りあげられた男が青い顔で言う、どうやら肋骨が痛むらしい

綾乃が手を離し、俺がそいつを仲間達の方へ押してやる

また肋骨が痛んだらしく、すごい目で睨まれた

綾乃と小声で会話をしてみる

「どうする？さすがにこれは手に余りそうだぞ」

「そう、だね。でも私はまだ気になることがある」

「ん？」

綾乃が一步前に出て黒ずくめ達に質問を投げかけた

「今度は私から質問があります」

「いいぞ、なんでも聞いてくれお嬢さん」

「最近、私達が住んでいた町で路面が発光する現象が目撃されています、あれはあなた方の仕業ですか？」

「路面が発光？そんなの魔方陣を起動すればいつだって光るだろ？
全て我々の仕業かと言われるもな……」

「私達の世界では路面があのように光るなんて事はまず無いことなんです」

「ん？そうなのか？じゃ何度か失敗したし、その時のものかな？一応道だけは繋がってたのか」

その言葉を聞いて綾乃の表情が険しくなる

「その発光は複数回目撃されています、私達のようにこの世界へと連れて来た人たちが他にもいるのですか？」

「へ？いや、俺らの召喚は今日が初の成功だけど…」

思わず、という感じで答える男はこれが嘘ならばなかなか腕の立つ役者だろう

(別口か失敗の数だけ光ったのか、こちらも正確な数を把握しているわけではないからなんとも言えないか…)

「ふう…それで、どうやって送還するんですか？」

「ああ、それはベルドルフ老師が起きればいつでも」

「ちよつと待て、綾乃の本気の《防御力無効》を受けたやつは意識が戻っても半日は起きれないぞ？」

それを聞いたとたん、黒ずくめの男達の顔に狼狽が浮かんだ

慌てた黒ずくめの一人が何か言おうとしたときそれは起こった

ドン！！！！

右側にあつた唯一の出入り口の扉が吹っ飛び、緑色の何かが部屋に転がり込んできた

「トツ、トロールだ！」

黒ずくめの男の一人が裏返った声で叫んだ

飛び込んできたトロールは目の前に倒れている老人を見つけると笑みを浮かべ、老人を抱えて部屋を飛び出していった。

部屋にいた他の者達には見向きもしない

肥満体型であるにもかかわらず、意外なほどの素早い動きだった。

呆気にとられた黒ずくめ達が我に返り、慌てて後を追おうと一歩踏み出した瞬間

狙ったかのように再び何かが飛び込んできて先頭の黒ずくめに食ら

い付いた

「ア、アースリザード！？何でこんなところにつ！」

男達の声は紛れも無い悲鳴だ

頭の高さは人の腰辺りまでだが、長さは7mを超えるゴツゴツした巨大なワニだ

体が長すぎるため、部屋に体が入りきれていない

これには俺らも悲鳴を上げかけたが、注意を引いてはまずいと思い悲鳴を飲み込む

「てめえ！ジヨットを離せ！」

「無理だ！やつに噛み付かれて生きてるはずが無い！最下級とは言え竜種だぞ！」

現にジヨットと呼ばれた青年はアースリザードの口を境にありえない方向に人体を曲げており

その口からは赤黒い液体が流れ落ちている。

仲間の吹き出した血を浴び、喚き散らす黒づくめ二人の後方

肋骨を痛め後に下がっていた男が、顔にかかった仲間の血をぬぐいもせずこちらを睨んでいた

いつからかは分からないが、おそらく視線の先にいるのは綾乃だろう。どうやら先の一戦が彼のプライドを傷つけたようだ。

仲間の死すら眼中に無いらしく、何事か口を動かすと姿を消した。

瞬間移動か不可視化か…

それを見た俺は我に返り、小声で綾乃に声を掛けた

「とりあえず俺らも脱出するぞ、背中に乗って俺の靴を持っていてくれ」

「わ、わかった」

さすがに普段冷静な綾乃も目の前の光景には動揺を隠せないようだ
視界の端に黒づくめの二人が部屋を遮断する障壁を張りアースリザ
ードの体当たりを防いでいるのが見えるが顔が真っ青だ、長くは持
たないのかもしれない。

靴を脱ぎ腕部の鬼化を解いて下半身を重点的に

俺のこの鬼化は普段服が破れないように調節して変化へんげしているが、
今はそんなことを言ってられそうに無い。

綾乃を背負った俺は壁を蹴り、アースリザードの背を飛び越えて、
再び壁を蹴る

この建物の作りなどわかるはずも無いが、通路をうろつくゴブリン
どもの上をまじらの如く跳びはね出口を目指す。

第二話 黒き石の部屋（後書き）

ギャグを挿もうとしたんだけど

思いついたネタが初見は笑えたんだけど

二度目以降が笑えない程度だったんで書き直しました。

（ ^ | ^ ;

ちよつと長かったかな？

第三話 青黒き炎

床も壁も等しく足場として石造りの廊下を駆け抜ける
通路ではゴブリンを時々見るくらいだ

(さつきから窓が無い、ここは地下か?)

角を曲がり部屋は無視して、ひたすら階段を探して走り続ける。

さつきまで居た部屋でのやり取りを改めて思い返してみるが

意識に無意識のフィルターのようなものがかかって感情が抑制されていたような気もする

自分は冷静に振舞えていただろうか?

状況に流されていただけではなかっただろうか?

聞いておきたかった事はあれで良かったのか?

背中に当たる胸の感触はワッホウーイ!

「亮平、真面目な顔をしているところ悪いが…何を考えている?」

「何でもありませんです大佐!」

(やつべー、なんで気付くんだよ。ポーカーフェイスは完璧だったはずなのに!)

それを言ったら背負っている人間の顔を、背負われている人間が見るのはまず無理なのだが…

階段を見つけて駆け上がり、途中に居たゴブリンは盾の上から勢いそのまま全力で蹴り潰す

なおも走り続けていると、綾乃が小さくつぶやいた。

「見捨ててきて良かったんだろうか?」

それは人に聞くというより自分に問いかけるような言葉

元の世界では、恨みを買ってでも弱者のために戦ってきた彼女の言葉
こっちの世界に来て、目の前であっけないほど簡単に人が死ぬ所を
見た

彼女も判ってはいるのだろう、次に休むことができるまでに、どれ
だけの戦いが有るか判らない今、強敵との戦闘は回避するべきだと
いうことは

そうでなければ次に死ぬのは自分達なのだ…

判っていても、それでも今まで過ごした日々が問いかけるのだ、
それでよかったのか？”と

「…あいつらが、異世界にまで助けを求めてきたというならその相
手は俺だ。俺が判断して蹴ったんだ、お前が悩むことじゃない」

こんな言葉はなんの慰めにもならない、別の人に対して助けを求め
ていたのだとしても、本当に危ないと思うなら手を伸ばすのが彼女
なのだから
だから、

「それに見ただろ？やつらの一人が消えるのを。あいつらは魔法使
いだけ、姿を消したり瞬間移動したりして、今頃みんな上手いこと
逃げてるさ。それとも最初に消えたやつが背後から奇襲をかけて逆
に倒してるかもしれないぜ。心配するだけ損だつて」

心にも無い希望的観測を言っておどけてみせる

地下には少数しか居なかった魔物も、上の階には倍近く存在し、鈍
色の甲冑を着た戦士達が魔物と戦ってる姿が見える

「あいつらだつて、必死に生きてる。今は俺らもここを切り抜ける
ことを考えよう」

背中に乗ったまま彼女は、軽く息を吸って、吐いた

「…ありがとう」

耳元で囁かれた言葉は、戦の中でも確かに聞こえた。

(実際は考えてる余裕なんて無いけどな！)

魔術師達を置き去りにした自分達にとって、どちらかが味方なんて事はありません

少し進むと左手側正面に鈍色の鎧とオリブの鎧、二種類の鎧を着た戦士達が互いに争いあう光景が見えた。戦いの激しさは今までの比ではない

(こつちが主戦場かよ！)

「オイ！お前達！そこで何をしている！」

声の方を振り向くと、他の兵より立派な鈍色の鎧の男を中心とした一団と目が合ってしまった

(まずい！)

「亮平！右手側5m先に窓がある！」

言葉を聞かぬやいなや、きびすを返し走り出そうとした俺に声がかかった

「待て」

その声にゾツとした俺は思わず振り向きかけるが、綾乃の声が叱咤する

「走れ！」

首筋をチリチリとした感覚が襲うが、全力で窓へと向かう背後からはギインという金属同士がぶつかる様な音が聞こえたが、そのまま窓を突き破って跳び出した。

逃亡した謎の二人組みに静止を促した男　　ガルドは楽しげな笑みを浮かべていた。

「ふむ、逃がしたか」

「見たことの無い衣服でしたが何者でしょうか？」

「おそらくは、ベルドルフのやつが呼び出したものだろう。そこそこ使えそうだが戦局を覆すほどではなかったようだな」

「…しかし敵に使われるのはまずいのでは？」

「逃すくらいなら殺しておこうと思っただが…逃がしてしまった以上は仕方あるまい、放っておけ。それより我らも撤退戦をはじめろぞ！」

「…ハッ！了解しました！」「」

（無事この戦を潜り抜けたら、いつか戦ってみたものだ）

内心大きくなる笑みを隠し、ガルドは指揮官の顔に戻った。

この戦い、明らかに敗戦であるにもかかわらず彼の表情から不敵な笑みが消えることは無かった。

窓から飛び出した亮平達は外に居た兵士達を二人で蹴散らした。

実は綾乃の《防御力無効》は生物や霊体に有効な能力だが、綾乃自

身が物理的な束縛を脱する訳ではないので、間に金属等を挟むと力が奥まで届かずに威力を十分に発揮できない
だから鎧を着た相手は俺が鬼の力でぶっ飛ばし、綾乃には殴りやすそうなやつを相手にしてもらった。

「ところでその木刀折れてないか？」

「さっきの隊長らしき男が投げた剣を叩き落したんだが、そのときに折れた。鉄心入りだったのだが…」

「入ってなかったらやばかったかもしれないってか？あの隊長、たぶんアースリザードより強いよな？」

「お爺様ほどではないと思うが、正直あの殺気は凄かった」

「…現実逃避はこのくらいにしてどうすつか？さすがに、この城壁の高さじゃ垂直跳びは無理だろ、10m近くないか？なんでこんなにとたけーんだよ」

「だが、正規の出入り口は制圧されていると見たほうが良いだろ…
亮平、壊せないか？」

「え、ええええ石の壁だぞ？たしかに、全力で物を壊そうとしたことは無いけどさ…」

だが他の手を思いつけない以上やるしかないようだ。

後方は綾乃に任せ、壁の前で精神を集中する

時間をかければより脱出が困難になる、壊せそうな手ごたえでも回数が必要であれば同じ事

（一撃で見極める…！）

左足を前に、右足を引き、弓を引き絞るが如く腰を捻り右腕を捻り突き出すッ！

ゴオオオオオーーーー！！！！

「え？」

「さすが、やれば出来るじゃないか」

「いや待てよ、なんか俺の手、青黒く光ってたぞ！」

「魔法が使える世界なのだ、私達も何か使えるかもしれないな」

「とか話してる間に爆音聞きつけた兵士が集まってきたし！逃げるぞ！」

俺達は壊れた城壁の穴から跳び出し、残党狩りが行われている市街地へと駆け出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9466x/>

異世界冒険鬼(仮題)

2011年10月29日02時20分発行